

The Kamenori Community かめのりコミュニティ

公益財団法人 かめのり財団は、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて、
未来にわたって各国との友好関係と相互理解を促進するとともに、
その架け橋となるグローバル・リーダーの育成を目的に事業を行っています。

K 公益財団法人
かめのり財団
Kamenori The Kamenori Foundation

2014年11月 No.17

今号の内容

- ◇国際交流事業助成
- ◇大学院留学アジア奨学生
- ◇高校生短期交流プログラム
- ◇海外日本語教育サポート事業
にほんご人フォーラム2014
ベトナム中学生日本語キャンプ
- ◇高校生カンボジアスタディツアー
- ◇第6回中学生交流プログラム(派遣)
- ◇ISAK サマースクール2014



高校生カンボジアスタディツアー「サンポーブレイクック遺跡にて」

国際交流事業助成 助成事業決定

本年度は、次の11件の事業に助成をしました。

〈一般公募〉平成26(2014)年度 助成事業一覧	(敬称略)
第1回 日本雲南大学生交流スタディツアー	認定特定非営利活動法人日本雲南聯誼協会
カンボジア地雷・不発弾被害者と日本の学生による国際平和交流事業	一般財団法人カンボジア地雷撤去キャンペーン
北東アジア学生ラウンドテーブル2014	北東アジア学生ラウンドテーブル
話してみよう韓国語東京中高生大会2015	「話してみよう韓国語」東京・中高生大会2015実行委員会
ミャンマー・フレンドシップ・プロジェクト	公益社団法人ガールスカウト日本連盟
日本とインドネシアの学生国際協働による被災地子ども対話交流	特定非営利活動法人地球対話ラボ
カンボジア・村びと共生プロジェクト	Ju-Ju ～カンボジア・村びと共生プロジェクト～
スリランカと佐賀の若者育成プログラム～佐賀で学び、アジアの友好の架け橋を築こう～	認定特定非営利活動法人地球市民の会
韓国民話「さんねん峠」ミュージカル公演と在日韓国朝鮮児童との交流	平間わんぱく少年団
アジア各国から途中入学した子どもたちの日本語学習サポート事業	特定非営利活動法人ひまわりの会
日本、東ティモール国際交流事業	学生団体 HaLuz

大学院留学アジア奨学生 熱く語り合った夏の研修交流会

奨学生の研究の進捗発表と交流を目的とする夏の研修交流会を徳島県鳴門市で9月23日(火・祝)から25日(木)まで行いました。3日間、行動を共にすることで、お互いを知り、友情を深め、そして異分野の研究への理解の場ともなり、絆と知識を深める有意義な研修交流会になりました。

鳴門海峡の美しい海と高く澄んだ青空に迎えられスタートした研修交流会。昨年からの奨学生が内容を企画していますが、今回は昨年の反省点を踏まえ、新たなアイデアも取り入れて進められました。

研究分野についてわかりやすく解説する「ミニ二講義」と博士論文を書くにあたっての心構えなどを話す「方法論」の時間を設け、教える立場にも学ぶ立場にもなり、積極的な質疑応答が行われました。所属する研究室とは異なる環境で、研究分野の異なる仲間と熱い意見交換をした3日間を奨学生自身の言葉で振り返ります。



研修中の様子



高校生短期交流プログラム 韓国訪問一個と個の交流を深める

公益財団法人 YFU 日本国際交流財団の実施により、関西地域の高校に通学する5名の高校生が8月に韓国を訪問しました。約1カ月間、ホストファミリーとともに生活をし、語学研修、文化施設視察のほか、現地の高校に通学し、同世代と学校生活を送る貴重な体験をしました。

ホストファミリーも高校で出会った友だちもみんな笑顔で温かく迎えてくれ、交流を深めました。実際に自分の目で見て、聞いて、感じることでその国を知る一番良い方法であり、人と人との出会いの素晴らしさを実感することができました。

修了式にて、YFU 韓国卒定夏会長と一緒に



奨学生のことば * 体験レポートより

高校での最後の日にクラスの友だちからいただいた手紙に、「日本がそんなに好きではなかったけど、あなたがこの学校に来て無条件に日本を嫌いと言っていたことを反省した」と書いてくれ、自分がかかわったことで、その人の気持ちを変えることができたことに大きな意味を感じました。

*

ホストファミリーのお友達から、「日本と韓国が政治的には関係があまり良くない中で、(韓国に)来てくれて嬉しい。いい所を知っていい思い出をたくさん作って帰ってほしい。こうして高校生が日本と韓国を行き来して、お互いに理解し仲良くなっていけたらいいですね」と声をかけられ、温かい気持ちのこもった言葉に、嬉しくて涙が出そうになりました。





1日目 9月23日(火・祝)

「海・渦・人」

文：洪 驥(コウキ)

天と海が似たような青緑色を共有し、ふと眺めていくとその境界線すら分からなくなるほど一種の調和した秩序が整っています。遠くない所に小さな離島が静かな海水に囲まれ、真っ白な汽船一隻が島のそばを通り抜けていくと、この油絵が流動しているように見え、記憶の中にしっかりと刻まれていきます。人を魅了させるこの風光明媚な地は、今回の研修先である徳島県鳴門市となります。

一日目の午後、テッテッさんと姜民護さんのそれぞれの研究内容の発表から研修が始まりました。周さんはミニ講義で、日本の独占禁止法について私たちにウェブで条文を引いてもらいながらその読み方まで教えてくれました。質疑応答では、皆で積極的に意見交換をしました。

「東西古今の 文化のうしほ 一つに渦巻く 大島国の 大なる使命を 担ひて立てる」……これは早稲田大学の校歌である「都の西北」の歌詞の一部です。今回の研修の思い出は決して美しい景色にとどまりません。歌詞どおり、様々な文化の潮が一つに渦巻くように、奨学生たちも異なる分野を専攻しながらも研究発表を通じて喜びと悩みを分かち合い、理解を深めることができました。そして、我々にとって、母国とこの「大島国」の架け橋になることはその「大なる使命」に当たるでしょう。渦の巻いた四国の海辺で、人は集まり散じていきますが、理想は永遠に消えません。



陶芸体験



2日目 9月24日(水)

「研究発表を通じた交流から 学問の広さを学ぶ」

文：姜 哲敏(カンチョルミン)

今日は、奨学生それぞれが研究の進捗を報告し、先輩の奨学生からは研究生活についての方法論の発表がありました。普段の研究生活では同じ分野の研究者との交流が多いのですが、今回は他分野の人々と話し合うことができ、非常に有意義な時間でした。

文学や社会学、法律、経済学など様々な分野の奨学生が集まり、お互いの学問分野を理解するのに難しく感じることもありましたが、分野を超えて色々な視点からの議論ができました。私たち奨学生は、他分野の人に自分の研究を分かってもらうために色々な工夫をするなかで、研究に対する知識を深めることができました。さらに、他分野を理解するための知識が得られ、もう少し広い視野から考える力がつけられました。

研究発表の後には、先輩の奨学生から大学院生としての日本の生活についての方法論の発表がありました。先輩の経験から留学生活の中で起きうる問題や博士号を取得するまでのプロセスを聞き、これから後輩の奨学生が研究生活を続けるにあたってとても有益な話でした。

この1日を通して研究発表による交流ができ、お互いの学問の深さや研究の楽しさを感じた大切なきっかけとなりました。

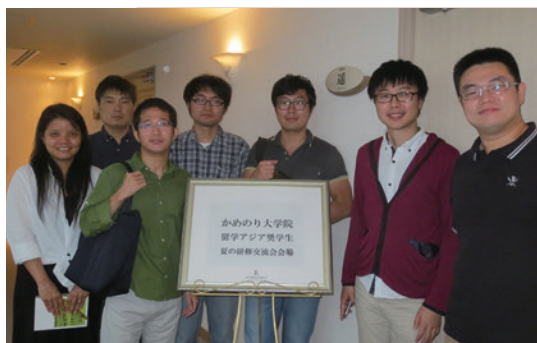
3日目 9月25日(木)

「東洋の『美』から西洋の『美』まで 一三日目の思い出」

文：周 鑫(シュウキン)

二日間の研究交流を終えて、三日目は鳴門市内視察になりました。最初は台風の影響を心配しましたが、天候に恵まれて三日目は秋らしい日和でした。ファースト観光地は、東洋の「美」が感じられる場所—「陶芸体験」で、奨学生のほとんどが初めての試みだったので、陶芸の先生にご指導していただきながら、自分が好きな形で陶器を作りました。その後は鳴門市の定番ツアーポイントの渦潮を見に行きました。船に乗って渦潮を通過して、自然の素晴らしさを感じました。そして、最後の視察地は大塚国際美術館で、西洋美術の古代から近代まで沢山の名作を鑑賞し、「西洋の美」が心に深く残りました。

財団のお陰で、今回の研修交流会で、奨学生同士より深く交流して、この夏の最高の思い出を沢山作りました。そして、今回の陶芸体験で、テッテッ先輩から、「陶芸の各層の繋がりをきちんとなしないと、崩れやすくなる。論文の作成も同じだ。章と章の間をちゃんと繋いで、最後に論文ができる。」という言葉をいただき、この繋がりを常に意識して、自分自身の研究を完成させようと決めました。最後に私は奨学生全員を代表して財団に感謝の気持ちを表し、来年の研修交流会もみんなで協力して、より良いものにしていきたいと思っています。



【夏の研修交流会 参加者リスト】

Htet Htet Nu Htay

(テッテツヌティエー / ミャンマー / 東京外国語大学)

姜 民護(カンミンホ / 韓国 / 同志社大学)

周 鑫(シュウキン / 中国 / 一橋大学)

張 碩(チョウセキ / 中国 / 大阪大学)

胡 新祥(コシンショウ / 中国 / 立教大学)

姜 哲敏(カンチョルミン / 韓国 / 筑波大学)

洪 驥(コウキ / 中国 / 早稲田大学)

海外日本語教育サポート事業

にほんご人フォーラム 2014 (Japanese Speakers' Forum 2014)

「にほんご人フォーラム2014」が、8月26日(火)から10日間、国際交流基金日本語国際センター(埼玉県さいたま市)で実施されました。東南アジア5か国(インドネシア、タイ、フィリピン、ベトナム、マレーシア)の高校で日本語を勉強している生徒と日本の高校生24名、そして同5ヶ国の日本語教師と日本の高校教師(英語、国語)12名が、ともに学び、交流しました。2013年に引き続き2回目の開催です。



生徒のプログラムは

日本語を使って、さまざまな背景を持つ人とともに活動できるようになることを目標に、6か国の生徒一人ずつが集まったグループで「新しいアイデアを考えて、便利なものを創る」という課題に取り組みました。「いつ、どこで、だれにとって、どうして便利か」を考え、グループで相談し協力し合いながら、発表会に向けてアイデアをまとめていきます。発表会では、温冷両方の飲み物が入られる水筒や、多様な使い方ができるスーパーヒーローなど個性あふれるアイデアが、絵や映像などを駆使して紹介されました。生徒からは多国籍でのグループ活動について「アイデアだけでなく文化もシェアできました。」という声が聞かれました。ホームステイや東京散策などの体験活動も含めて、日本語の新しい世界が広がった10日間だったことでしょう。



「便利なもの」を発表



プログラムの視察においてレクチャーを受ける教育行政官



教師は

自国の教育政策を前提にした日本語(外国語)教育の内容、方法について考え、具体的な授業案を作成するというプロジェクトに取り組みました。生徒プログラムでの生徒の「学び」を観察しながら、また、お互いの教授経験の共有、意見交換をしながら取り組んだプロジェクトの成果は、学習者中心をより意識した授業案、他教科や実社会とのつながりを視野に入れた授業案など、帰国後、各国で実践した後の報告が楽しみな内容でした。この実践報告は、外国語教育で何ができるかを示す例として蓄積されていくことが期待されます。



教師たちによる意見交換

「にほんご人フォーラム」とは

かめり財団と国際交流基金の共催事業で、2012年(準備会合)に始まりました。「にほんご人」とは国際社会において日本語を使って何かを達成したいという意思を持ち、日本語でコミュニケーションをする人々の総称です。「にほんご人」が増え、これからの社会で活躍することは21世紀の日本にとって大きな意味があると考え、そのために必要な能力の育成を組み込んだ外国語教育のモデルを創造・実践するとともに、中等教育における「にほんご人」ネットワークを形成し、日本語を媒体とした若い世代の相互理解の促進とグローバル人材の育成を目指しています。

「にほんご人フォーラム」を通じて人のつながりが、

さまざまな形で生まれています。生徒の成果発表会には、昨年「にほんご人フォーラム2013」に参加した日本人生徒2名が来てくれました。大学生になった先輩に会って、今年参加した生徒は自分の1年後を想像したかもしれません。また、去年参加したフィリピンの生徒は、日本語を勉強したことのない人に日本語を紹介する活動をしています。「にほんご人」が広がっているうれしいニュースです。

一方、教師は、去年参加した教師が作ったFacebookグループに今年の参加教師が招待され、ネットワークが広がりました。

かめり財団と国際交流基金は、「にほんご人フォーラム」事業を10年間実施し、日本語(外国語)教育が各国の教育目標に沿った貢献ができるものにしたと考えています。今年度は、国際交流基金が招へいた、「にほんご人フォーラム」参加国の教育行政官が、プログラムの視察を行い、日本語教師・生徒が自国の教育行政官と日本で直接話す機会が設けられました。これからは日本語(外国語)教育がもつ可能性について教育・行政関係者に訴えていく努力も続けていきます。

海外日本語教育サポート事業 ベトナム中学生日本語キャンプ

東南アジアの中等レベルの日本語教育支援の一環として、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターの実施する事業に助成しました。ベトナムでは第一外国語の選択肢に日本語が導入されており、さらなる日本語への興味関心を高めってもらうため、教室活動では得られない日本語学習の楽しさを体感するとともに、既習語彙・文型の積極的な活用を促すことを目的に実施しています。



アイスブレイキングでみんな友だち



ペットボトルでけん玉づくり



新聞紙で紙鉄砲作り



スイカ割りで遊ぶ生徒たち



日本語ウルトラクイズ「答え、分かったよ!!」



キャンプファイヤー

「ベトナム人中学生が日本語で交流」

8月5日(火)～7日(木)にかけて「ベトナム中学生日本語キャンプ2014」がホーチミン近郊のザンディエン滝キャンプ場にて行われ、ベトナム4都市(ハノイ・フエ・ダナン・ホーチミン)の中学生42人が参加しました。今回のキャンプは日本語や日本文化への理解を深めながら「日本のエコ」について学ぶというテーマで実施されました。

3日間のキャンプで生徒たちは「オリエンテーリング」でチェックポイントを回り日本語を使ったタスクに挑戦したり、「日本の遊び」で長縄やけんけん相撲、だるま落としなどを体験。また日頃学んでいる日本語の成果を発揮する「日本語ウルトラクイズ」にも挑戦しました。

「オリエンテーリング」ではチェックポイントで獲得したアイテム(リサイクル資材)を集めて「おもちゃ」を作製。手作りけん玉や新聞紙鉄砲などを使ったチーム対抗のコンテストでは熱戦が繰り広げられました。その後、生徒たちがおもちゃをかばんにしまう姿がとても印象的で、普段何気なく捨ててしまっているものへの見方が少し変わったかなと感じる嬉しい瞬間でした。

「日本の遊び」で行ったスイカ割りでは「前! 右! 右! そこー!」など、日本語が飛び交い、いつもの教室とは違った雰囲気の中で生徒たちと先生達もびっくりにしていました。

また、「日本語ウルトラクイズ」では回答権を得るために「飴食い競争」や「二人三脚」など運動会の要素を取り入れましたが、いずれのチームも力が拮抗しゴールを駆け抜ける生徒たちに順位を付けるのが大変なほどでした。

最終日には、キャンプファイヤーを行い、ゲームをしたり踊ったりし、ベトナム人の先生扮する火の女神の登場では大歓声が上がりました。その後もテントに戻った生徒たちは夜遅くまで新しくできた日本語を学ぶ仲間との交流を楽しんだようです。

アンケートの満足度も非常に高く(5点中4.7点)「もっとみんなと一緒に過ごしたかった」というコメントが多く見られました。このイベントに参加した生徒たちの日本語・日本文化への興味関心が更に深まり、日本との関係が末永く続くきっかけとなることをキャンプに携わった教師・スタッフ一同願っています。

報告：国際交流基金ベトナム日本文化交流センター日本語指導助手 野口佐美



高校生カンボジアスタディツアー 刺激と気づき—体験を伝えていきたい

本年度、新たな高校生のプログラムとして、公益社団法人ユネスコ協会連盟の実施による「高校生カンボジアスタディツアー」を支援しました。カンボジアにおけるユネスコ世界寺子屋運動の実施地域や世界遺産などを訪問し、それぞれのプロジェクトの現状を知り、実際に現場で知り得たことや交流、体験を通じて理解を深めることを目的としています。



チョンニア寺子屋にて



地元の高校生とサンボーブレイクック遺跡見学へ



サンボーブレイクック周辺の村人宅訪問



寺子屋の子どもたちと書道で交流



バイヨン寺院にて遺跡修復体験（石の欄干の汚れの除去）

「カンボジアでの学びを未来へ」

8月13日（水）～22日（金）の10日間、全国から選ばれた8名の高校生が、カンボジアの首都プノンペン、サンボーブレイクック遺跡を擁するコンポントム、当協会連盟のプロジェクト地であるシェムリアップの3都市を訪問しました。

プノンペンでは在カンボジア王国日本大使館に隈丸優次大使を表敬訪問し、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）プノンペン事務所ではアンコール遺跡群の保全活動、識字教育の現状などについて学びました。かめり財団のご好意でペルビュー・サービスアパートメントに伺い、関係者から「全て現地の人材と資源によって」「カンボジアの課題解決に取り組む」企業方針と、ビジネスや社会貢献活動について説明いただき、経済発展が進む首都の現状を知ることができました。

サンボーブレイクック遺跡では現地の高校生がガイド役となり、古くは7世紀の遺跡や周辺の村の生活様式を教わりました。遺跡の歴史だけでなく、現地を歩かなければ決して分からない、植物や虫の大きさや種類の多さ、村の生活の知恵、人びとの温かさ、千年以上も前の遺跡が“炎天下の下草刈り”という地道

な作業に守られてきたことなど、多様なカンボジアの姿に日本の高校生たちは様々な刺激を受け、気づきを得たようです。

シェムリアップでは、当協会連盟が協力しているバイヨン寺院で石像修復プロジェクトの一部を体験し、世界遺産がどう平和につながるのか意見交換をしました。また当協会連盟が実施している貧困村における教育・生活向上支援の現場では、困難な状況にあっても懸命に学び続ける子どもたちや、技術指導を受けものづくりに励む大人たちとの交流を通して、更に考えを深めました。

最終日、高校生たちは「STA∞STA」というグループを作り、カンボジアの現状を一人でも多くの方に伝えるため、新聞投稿、文化祭での発表など、具体的な行動を起こすことを決めました。これまでに5名が新聞に掲載されています。個人でも帰国後の目標を立て、全員が大学生になったら再び8人でカンボジアを訪れることを計画しています。素晴らしい機会を与えていただいた、公益財団法人かめり財団に感謝申し上げますと同時に、近い将来、日本とカンボジアの懸け橋となる人材が育つことを期待せずにはられません。

報告：公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 教育文化事業部 丸戸亮子

参加した高校生の声

このツアーを通して今後の人生の指針になること、生きていくうえで考えさせられることを多く学びました。「伝える」ことの本質然り、「地道な努力」然り。ほかにも、「平和」や「幸せ」など、考えさせられることは山ほどありました。自分に大きな影響を与えてくれた、このツアーを支えてくださった全ての方々に感謝します。



第6回中学生交流プログラム（派遣） インドネシアの中学生と机を並べ授業に参加

日本の中学生がアジアの国々を訪問し、現地中学校での同世代との交流やホームステイを通じて、アジアへの興味・関心を持ってもらうことを目的としている中学生交流プログラム。本年度は、10月5日（日）から8日間、一般社団法人国際フレンドシップ協会（IFA）の実施により経済成長を続けるインドネシアを訪問しました。



英語の授業に参加

大都市ジャカルタと 太陽輝くバリ島

出発前日に、団長を務める山本伸先生（IFA講師 / 四日市大学教授）と全国から7名の中学生が集まり、結団式と事前研修を行いました。団員として結束を固め、インドネシアへ出発！

ジャカルタは、高いビルが建ち並び、広い道路を自動車とバイクが埋め尽くす活気ある大都市。表敬訪問した在インドネシア日本国大使館では、竹山参事官・広報部長と久保専門調査員からインドネシアの現状や日本との密接な関係を学び、独立記念塔（モナス）やインドネシア最大のモスクを見学しました。青い空と海、心地良い海風に迎えられたバリ島では、世界無形文化遺産に登録されている伝統的布製品、ロウケツ染めの「パティック」工房で染めの体験や伝統的なバリの民家を見学し、最終日には、海沿いにあるタナロット寺院で美しい夕日を鑑賞しました。



パティックの染めを体験



イスラム教のお祭り、犠牲祭での特別な料理をいただきました



アルマージャン・イスラム教総合中学校訪問

大歓迎を受けた中学校訪問

初めに訪れたジャカルタ近郊にあるアルマージャン・イスラム教総合中学校では、「ようこそいらっしゃいませ」と日本語で書かれた横断幕と校門で折り紙で作った飾りを団員それぞれの首にかけてくれ、出迎えを受けました。この学校には幼稚園から高校まであり、多くの児童・生徒が「こんにちは！」と日本語で声をかけてくれました。中学生の皆さんはインドネシアの伝統的な踊りや歌、そして日本の歌で歓迎してくれました。

バリ・デンパサールにあるSMPセント・ヨセフ学校では、3日間、生徒の家庭にホームステイをしながら、数学、英語や音楽などの授業に参加。どの授業も活気があり、音楽で披露した童謡「ふるさと」は、黄色い歓声があり大好評でした。学校が7時半から始まること、質問が飛び交い先生と生徒の積極的なやりとりや笑顔の絶えない教室は、日本との違いを知る体験となりました。

両校で浴衣を着て行った日本文化紹介では、空手の型や宮城県仙台のすずめ踊りを披露し、茶道のお点前や書道では、作法にみんなが興味津々でした。インドネシア語の歌「ラサヤン」を歌い、教室にあふれんばかりの生徒から大きな拍手を受けました。



中学校訪問 折り紙の手作りの飾りで出迎え



数学の問題を一緒に解きました

台風で飛行機が大幅に遅れ、現地到着は夜中。数時間の睡眠での中学校訪問でしたが、大歓迎と質問の嵐に「睡眠不足も感じないほど感激した」との感想がありました。また、「母国語でない英語で積極的に質問してくる姿勢にその大切さを学んだ」とアジアの同世代から刺激を受けました。

自らの五感で感じた今回の体験を自身でも振り返りつつ周囲にも伝え、ほかのアジアの国への関心にもつながっていくことを願います。今後、同じアジアの国の一員としてお互いの理解を深め、さらにさまざまな体験を重ねアジアの国々との架け橋になるよう団員の将来に期待しています。

ISAK サマースクール 2014 アジアからの中学生を支援



支援した中学生との懇談会で



授業風景 リーダーシップ

授業風景 デザイン・シンキング

学校法人インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢 (ISAK) が実施するサマースクールが、7月19日(土)から31日(木)までアジアを中心とする24ヶ国・地域から80名の中学生が集まり行われました。ミャンマー、ブータン、ベトナム、ネパールの中学生4名がかめりの財団の支援を受け来日しました。

このサマースクールは、「多様性に対する寛容力」「問題設定能力」「困難に挑む力」を兼ね備えたチェンジメーカーの育成と国際交流を通じての異文化理解を深めることを目標にしています。軽井沢の緑豊かな自然の中、座学だけではなくチームでの協働作業をしながら、「リーダーシップ」「デザイン・シンキング」「国際交渉」などのユニークな授業が世界各国からの教師陣により行われました。多様な背景を持つ中学生たちが、言語、宗教、経済的な差異を超え、お互いの考え、意見を尊重し、皆で力を合わせ、助け合う姿が印象的でした。中学生からは、「真のリーダーとは何かを学ぶことができました。」「自分の言動のすべては、他人の影響を受けるものではなく、自身の意志によってコントロールできるものだと学びました。そして、ひとつひとつの選択が自分を創っているのだと気付きました。」などの感想があり、約2週間で得たものを胸に抱き、目を輝かせながら帰国の途につきました。

報告：学校法人インターナショナルスクール・オブ・アジア
軽井沢 (ISAK) 事務局

海外生のレポート

日本に住み始めたころは、日本の生活に慣れるのがとても大変でした。日本語があまり話せず、ホストファミリーや友だちとは言葉の壁を感じました。私の国と日本の文化は違うのでたくさん問題と誤解があり、ホームシックになりました。でも、ホストファミリーや友だちの他にもたくさんの方々が私をサポートしてくださり、今は日本の生活に慣れてきました。今後は、日本語能力試験のために努力し、周囲の人との関係も強化していくために、私はもっと色々なことにチャレンジし、小さいことから大きなことまで多くを学ばなければなりません。

2014年3月来日、埼玉県内の高校に通学 インドネシア Mr. Ervin Naufal Arrasyid



今後の予定

- 11月 第6回中学生交流プログラム実施 (受入 インドネシア)
- 1月 かめりフォーラム 2015・第8回かめり賞表彰式
【高校生短期】韓国・中国から高校生来日
- 2月 【高校生長期】第8期受入生帰国
王敏理事講演会 (新潟・ハルビン友好市民の会実施)
- 3月 【高校生長期】第9期受入生来日

＜編集後記＞

この夏、弊財団が実施、支援する事業で、日本の高校生が韓国やカンボジアを、東南アジアからたくさんの高校生が日本を訪問した。それぞれの目的で共通しているのは、自分自身の目で訪問した国の状況を見て、同世代と交流を図ること。参加者が、近い将来、アジアがひとつの輪となり助け合い協力していけるような関係構築に貢献する人材になることを大いに期待したい。(菊地)

発行人 / 西田 浩子
編集 / 菊地 佐智子
デザイン / イワブチサトシ (BUTI design)
印刷 / 佐伯印刷株式会社



日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します！

公益財団法人 **かめりのり財団** The Kamenori Foundation

〒102-0083 東京都千代田区麹町 5-5 共立麹町ビル 103

TEL : 03-3234-1694 FAX : 03-3234-1603

E-mail : info@kamenori.jp URL : http://www.kamenori.jp/